

運命の岐路

柔らかいもち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

優しき心に見合わぬ戦いの才を与えられた一人の戦士。これはそんな戦士のあり得たかもしれない物語である。

『雨の日に生まれた戦士がダンジョンに行こうとするのは間違っているだろうか』のIFストーリーです。上記の作品を見てから読むことをお勧めします。

以下作品へのURL。

<https://syosetu.org/novel/214364/>

目次

設定・補足	1
白い兎と黒い戦士	4
白い兎と黒い戦士 2	21
白い兎と黒い戦士 3	42

設定・補足

・レイン。

本作の主人公。出典はクロスオーバーさせている『レイン』の主人公。

『レイン』原作において、レインは屈強な兵士が万を超える軍勢で挑みかかってもかすり傷すら付けられない最強の魔獣、ドラゴンを十八歳で単独で討伐。ドラゴンの圧倒的な膂力や耐韌性、半永久的な寿命や莫大な魔力を手に入れた『ドラゴンスレイヤー』になる。

ちなみにこの時討伐したドラゴンだが、人類でも上位に位置する戦士を相手取った際に『お前では千人集まったところで我に勝てない』と告げた別のドラゴンが『友（レインが倒したドラゴン）を超える力を持つ同胞はおらず、自分の方が強ければ力に訴えてでも止めていた』と言うくらいには強かった。レインの討伐したドラゴンは人類を滅ぼそうとしていた。

ちなみにレインが剣を使い始めたのは十四歳の冬（誕生日は不明）。それまでは剣に触れたことはないで、異常なまでの成長速度である。きつかけは恋人が目の前で殺されたこと。ありふれた悲劇に思えるかもしれないが、この時からレインは心から笑うこ

とができなくなり、『もし可能なら世界と引き換えにしても恋人を助けたかった』と本気で口にするほど愛していた。

・なんでLv. 8、しかも限界突破したところから始まったの？

最初はアルバート（とある方によれば推定Lv. 12）みたいに『恩恵』なしの素の身体能力で始めたいと思ってた。だけど「えー、『恩恵』なしって余程の理由がないとダメなまを軽く見てる風に思われたい？ あと数値が見れた方が興奮する」という理由で『恩恵』はありになった。

じゃあどの程度の強さにするか？ メインルートを書き始める前に読んだ『ファミリアクロニクル・エピソードフレイヤ』ではゼウスとヘラの最強の眷属のLv. は8と9。それ以外にもLv. 7が結構いる集団を虐殺したのがラスボスとも言える『黒竜』。生半可なLv. じゃ納得できない。

しかし……主人公には『ダンジョンに行っていない』という条件がある。Lv. 15とかLv. 20とかにしてしまえば、『そんな強さのモンスターが都市外いたら世界終わってるだろ』や『ゼウスとヘラももつと対策して強くなるだろ』や『突っつかれたら答えれんのか』とブーイング殺到間違いなし（被害妄想）。都市外の（多分）最高が「ナイト・オブ・ナイト」という人物のLv. 7。故にLv. 8で能力値の限界突破が最終

的な結論になった。

・どんな理由で『ダンまち』と『レイン』をクロスオーバーさせたの？

『レイン』の作者様が亡くなってしまう、どんな形でもいいから『レイン』の完結を見た
いと思つたのがきっかけ。しかし、設定をガン無視してしまえば意味がない。設定が噛
み合つて、尚且つ作者が好きだったのが『ダンまち』だった。

『レイン』における（自分への怒りと憎しみによる）成長速度↓『ダンまち』の『スキル』
で補える。

『レイン』でのドラゴン↓『ダンまち』の『黒竜』。

のような感じで当て嵌まる。

『レイン』のいいと思える所は最初から最後まで俺TUEEE！とかじゃなくて、
ちやんと強くなる理由もあったり、べらぼうに強くなつても苦戦することがあつて緊迫
感があること。なのでラスボスである『黒竜』をメインルート最初の話で相打ち寸前ま
で追い詰めてるけど、これも設定と伏線なのです。ドラゴンに該当する『黒竜』をボコつ
て終わりなんてつまらないので、『ダンまち』の世界観などを考察したうえでオリジナル
ストーリーを作つたのです。

白い兎と黒い戦士

『お前がベル・クラネルだな』

たった一人の家族だった祖父が亡くなって半年後。その日の出会いを、ベルは昨日の出来事のように覚えている。

西に沈んでいく太陽の光に照らされて輝く稲穂の海にいたベルが声をかけられて振り向くと、そこには真つ黒な青年が佇んでいた。

長袖の黒シャツに黒い長ズボン、首には漆黒のマフラーを巻き付け、髪や瞳も黒曜石のように美しい黒だった。ちっとも笑わない相貌と全ての感情を封じ込めているように静かな眼差しも、この青年のものならひどく自然に思えた。

同性のベルでも目を奪われる容姿をしているこの青年と認識はない。なのに、青年はベルのことをハッキリと認知しているようだった。

『魔が差した、とでも言えばいいのか……あの竜だけは確実に勝てるとは思えないからな。彼女にも思い残すことがないようにしろと言われたのを思い出したから、友人の忘れ形見を一目見てから行くつもりだった……本当に、俺は救えないな。彼女に時間が無いのを知っているのに、最低な真似をしようとしている』

ブツブツと、青年は顔に手を当てて独白を続けていたが、やがて自嘲の笑みを浮かべながらベルの前までやって来た。

青年とベルの身長差は大きく、手を伸ばせば届く距離まで近付けば首を上に向けなければ視線を合わせられない。更に青年の腰には、英雄譚の挿絵でしか見たことがないような立派な剣が佩かれている。

それでも、ベルは青年を怖いとは思わなかった。なぜなら――

『初めまして、ベル。俺の名はレイン』

涙は零れてないし、嗚咽だって聞こえない……だけど、ベルには青年が泣くのを必死に我慢しているように思えたのだ。

『君の叔母の友人で――君の兄だ。腹違いのな』



「うわあー！ レインさん、オラリオです、オラリオ！ ここからでももう見えますよ！！」

「……摩^パ天^{ベル}楼と無駄にでかい壁しか見えんが、お前はそれで満足なのか？」

「はっはっは、白い坊主は初めてオラリオを目にする奴等と同じ反応をするな」

「それに比べて真つ黒な兄ちゃんは醒めてるっつーか……夢がねえな。人生損するぞ」

どうして思ったことを口にしただけでボロクソ言われるんだ——この世界の理不尽を体験したレインが洩面を作る中、馬車の上で揺れるベルは笑顔ではしゃいでいた。

故郷の田舎で生活している間、世界中を旅してきたレインに色んな話を——しつこくせがんだせいでウザそうな顔をされながら——聞いてきたとはいえ、実物を見るのはベルは初めてなのだ。それも大好きな英雄譚の舞台にもなっている迷宮都市！

富と名声、運命の出会いだつて存在する『世界の中心』。鳥肌が立つくらいに興奮で心を震わせたベルは、

「ありがとうございます、おじさん！ 僕、ここで大丈夫です！」

ここまで無償で運んでくれた気のいい行商に礼を言いながら飛び降りようとした。

「阿呆。危ないし、この距離を走れば到着する頃には汗で気持ち悪くなるぞ」

が、獲物に飛びかかる蛇のように伸びたレインの手に首を掴まれ、容赦のない力で馬車に引き戻された。ぐえっ、と潰れたカエルのような汚い声が口から飛び出す。

示し合わせたかのような一連の流れに、年老いた御者とヒューマンの行商は面白そうに笑い、ベルは恥ぢずかしさで真つ赤になった。

その後、オラリオの入口である巨大な石壁に辿り着いたのだが、

「ベル、検問には一人で行け。オラリオの中で合流するぞ」

「え、ええっ!? 僕一人で知らない人達と難しいやり取りをしろってこと!? っっていうかレインさんは検問を受けないんですか?」

「だって長いし……面倒臭いし……門番がむさくるしい野郎だし」

「どれが本音ですか!」

「冗談はさておき……困ることが二つある。一つはどうでもいいが、もう一つが問題だ」
「何ですか……?」

「——俺、指名手配受けてるから。下手したらずっとオラリオに入れない」

指名手配って何をしてそうなったんですか——繰り返し叫ぼうとしたベルにピンタをかまして黙らせ、レインはとんでもなく高い巨壁に接近していく。不思議なことに、ベル以外の誰もレインに注目しない。

痛む頬を涙目でさすりながらレインが何をするつもりなのか目を向けていると、レインは壁際でぐっと膝をたわめた。そのままばんつと跳躍し、凄まじい速度で上昇してい

く。そして壁の向こう側に消え、戻ってくることはなかった。

首が痛くなるほど上を見ていたベルは、信じがたい光景に目を見開いて茫然とするしかなかった。当然、周囲からは奇妙なものを見る目を向けられ、再び恥ずかしい思いをすることになる。



「随分と遅かったな……ナンパでもしていたのか?」

「してませんよ! 荷物を置くための宿を探していたのと、レインさんが密入国しちやったことを頑張って隠していたんです!」

「ああ、動揺して怪しまれた訳か。……バレなきや犯罪じゃないという名言を知っているか?」

「それはまごうことなき迷言です!」

待ち合わせの場所を選んだのは『冒険者墓地』。ベルがオラリオにある名所の名前をここかバベルくらいしか知らなかったのと、単純にベルがここに来たがっていたからである。ベルもレインも『古代』の英雄達の墓に黙祷を捧げ、今はレインの荷物を置いために宿へ向かっている。

「ここです、ここ。一晚八〇〇ヴァリスでご飯は出ませんが、三日なら二〇〇〇ヴァリスにしてくれるんですよ」

寂れた街路に建てられた木造の宿の扉を開けながらベルが宿代やサービスの説明をする。

「ふん……これで一泊が八〇〇ヴァリスか」

宿の中を一通り見渡したレインが鼻を鳴らす。

カウンター

長台で情報誌を読む中年の店主が居

心地悪そうに視線をさまよわせるのを確認し、ベルには万が一に備えて所持金の半分を部屋に置いてくるように言っここから排除する。

二階へ上がっていったベルの姿を尻目に、

カウンター

長台にわざとらしく音を立てて金を置い

た。更に目が泳ぎ始めた店主を冷たい眼差しで見下ろし、すつと宿の片隅に置かれた壺に指を向ける。

デコピンをするように指を弾く。——剣で斬られたように壺は真つ二つになった。店主の顔が一気に青ざめる。

「わ、悪かった。好きだけタダで泊まってくれていいし、なんなら食事も付ける。だから嘘を吐いたことは秘密にしてくれ。な？」

媚びるような笑みを浮かべた店主が渡してきた金貨の詰まった袋に見向きもせず、レインは背を向けてベルのいる二階へ歩みを進める。

「無駄な欲をかいたな……その金が貴様の命の価値だ」

店主は汚らしい体液を垂らしながらへたり込んだ。

翌日、ベルは謎のサービスを受けて首を傾げることになる。

「また、断られた……」

半円上の広場で僕は落ち込んでいた。石の段差で首を垂れさせて落ち込む僕は、きつと職を失ったことを家族に打ち明けられない父親に似た雰囲気を感じている。

「運がないのもあるが……見る目もないな、お前は」

「うっ!？」

呆れているのを隠そうともせずに放たれたレインさんの言葉が僕の胸を抉る。早い話、僕は入団を求めた全ての「ファミリア」にすぎなく断られていた。ちなみに十連敗である。

気合いとやる気を漲らせて、派閥のエンブレムが飾られた本拠ホームを片っ端から尋ねようとしたら、僕が入りたいと希望した「ファミリア」全てにレインさんは悉くダメ出しを

した。納得する理由を求めれば『お前だけで行った後、俺だけ行けばよくわかる』とだけ言い、レインさんは即座に実行させた。

結果、僕は断られてレインさんは入団を許可された——『目が節穴の猿ばかりがいる見世物小屋に入る気はない』とレインさんは入団を拒否したが。あからさまに差別されて心を直接殴られた気分だったけど、少しだけ気が楽になったのは内緒である。

「言っておくが、お前も目が節穴の猿に含んでいるからな」

「ぐはあっ！」

胸を押さえて蹲る。そうだ、レインさんの忠告に耳を貸さずに色んな「ファミリア」に突撃して断られたのは僕だった……。頭の悪い兔を見るようなレインさんの目がとても痛い。

「……時間はまだあるな。よし、ついてこい」

「え？」

ちつとも立とうとしない僕の側でずっと佇んでいたレインさんが急に動き出す。この人が一度やると決めたら相手の反応を待たずに実行するのは半年の生活で身に染みてわかつていたので、気持ちを切り替えながら慌てて立ち上がる。

少し絶望するくらいある足の長さの差で距離は開いていたけれど、露店で『じゃが丸くん』なるものを購入していたのですぐに追いつけた。揚げた芋料理を一つくれたこと

に感謝をしながら尋ねてみる。

「あの、どこに行くんですか?」

「ついてくればわかる」

「……」

それつきり、レインさんは何も言わなくなってしまった。この人、口数が少ないのに加えて、無駄なことが嫌いだからなあ……。潔く諦める。

人混みが存在しないかの如くすすいすすい進んでいくレインさんに置いていかれないよう必死に足を進める。初めて見る大都市の街並みに感動する暇も、周囲の様子を確認する余裕もない。はぐれてしまえば本当に迷子になってしまう。

人混みがまばらになってレインさんの横に並んだ時、僕はへろへろだった。貧弱な僕の醜態にレインさんは小さく息を吐き、歩く速度を緩めてくれる。自他共に男性に厳しいことを認めているレインさんだけど、なんだかんだ言って優しい。

「着いたぞ」

休憩を挟むことなく歩いてきたレインさんがようやく止まった。そのことに安堵しながら、額の汗を拭って顔を上げ——引き攣った笑みを零してしまった。

そこにあっただのは周囲の建物と比べて群を抜いて高い長大な館。高層の塔が槍衾のように集まり、赤銅色の邸宅がいくつも重なっている姿は炎を連想させる。最も高い中

央塔では滑稽な笑みを浮かべる道化師トリックスターの旗が揺れていた。

「あの、レインさん……ここって、ひよつとして……？」

「ひよつとしなくても【ロキ・ファミリア】だ。それにしても意外だな。都市最大派閥で世界的にも有名になっているとはいえ、あの超絶下田舎にいたベルが知っているとは」
「昨日、レインさんと合流する前に人から聞きました……」

疲れとは別の汗が噴き出してくるのがわかる。今まで入団を申し込んだのは人員募集中の無名に近い中小派閥で、有名な【ファミリア】は一つもない。僕のような田舎者が何から何まで世話されるのが申し訳なかったのもあるが、大手の【ファミリア】は一切の入団を受け付けていないと聞いたからだ。

正門に立つ二名の男女、彼等はきつと冒険者だ。僕みたいな凡人とは存在感が違う。……：そういうえば、レインさんからは彼等みたいな存在感を感じたことがない。どうしてだろう？ そう思つてレインさんを見たら教えてくれた。

「……自慢じゃないが、俺はお前や他の輩とは格が違い過ぎる。気の小さい奴が殺気をぶつけられただけで命を落とすように、俺が存在感を剥き出しにすればあらゆる生命体が死に絶える。気を強化する『発展アビリティ』もあるしな。常にそういったのを抑えてるんだ」

いくら騙されやすい僕でもこの話は信じなかつただろう。だけど、オラリオの巨大な

壁を軽々と飛び越えたあの跳躍力を見れば、否定することができなくなる。

今になってこの人がとんでもない存在じゃないのかと悟った僕を置いて、レインさんは門番に近付いた。

「止まれ。何の用だ」

「腰の得物を見るに入団希望者か？」

「まだ俺は決めていない。が、アイツは入団希望だ」

ちよつとお!? まだ心の準備ができてないんですけど!? 大派閥の団員から測るような眼差しを向けられ、僕は慌てふためきながら直立した。通りすがりの住人にクスクスと笑われ耳が真っ赤になる。

「細いな。これまでに武器を振ったことはあるのか？」

「ない。得意な武器もこれから探す予定だ」

「……前職は何だ？」

「強いて言うなら農民だ。農具を使ってたから多少力はあるだろう」

「——話にならない」

変化はすぐだった。

「栄えある【ロキ・ファミリア】に武器も持たずにノコノコ現れ、更には前職が農民だと？ 荷物持ちサボッタとしてすら使えない。出直せ、身の程知らず」

測る眼差しが侮蔑の視線になって、声音は僕を嘲笑うものになった。周囲の人達からも『身の程を弁えろ』と失笑や舌打ちをぶつけられた。

「ここには農民だった者がいると記憶しているが」

「ラウルさんのこと？ あの人を貴方達みたいな田舎者と同列に扱わないでほしいわね。ロキ直々に眷属に選ばれ、今では団長の後釜として期待もされてるの。その子を見るからに才能ないじゃない」

（才能の有無を見分ける目はお前にはないがな）

「なんですかその目？」

「別に」

手足から熱が失われていく。胸に穴が開いたような虚無感が生まれる。寂しさと悔しきで涙が滲む。

ここから恥も外聞もなく逃げ出したかった。けれど、唯一の拠り所であるレインさんから離れることができない僕は反論の余地もないほど弱かった。痛いほどに手を握りしめて会話が終わるのを待つ。

「さつさと消えろ薄汚い田舎者。そろそろ幹部の皆さんが『遠征』の後始末から帰って来るんだ。邪魔になる前にどいておけ」

「……最後に聞きたい。ここで一番L.V.が高い者は誰だ？」

「はあ？ これだから田舎者は……【勇者】^{フレイバー} フィン・デイルムナ、【九魔姫】^{ナイン・ヘル} リヴエリア・リロス・アールヴ、【重傑】^{エルガルドム} ガレス・ランドロックの御三方が世界に十名もいないし、6です。貴方には一生縁のない方々ですよ」

「そうか、よくわかった」

レインさんがこちらにやって来る。よかった、やっとこの居心地の悪い場所から解放される――

「行くぞ。こんな蛆虫^{ウジ}派閥、一度でも入団したら人生の汚点になる」

——空気が凍り付いた。

どこまでも冷たく、しんと静まり返った表情で吐き捨てられた侮蔑。なのに瞳は透き通っていて、僕は今の侮蔑をこの人が口にしたと信じられなかった。

「貴様、今なんと言った!!」

「……? 蛆虫派閥と言ったんだが、聞こえなかったのか? 『神の恩恵』^{ファルナ}を授かったなら五感も底上げされているだろうに」

真つ赤になつて怒鳴り散らす男性団員に対して、レインさんは心底不思議そうな顔をして首を傾げる。そこに誤魔化す気が一切ないと嫌でもわかった。

当然、「ロキ・ファミリア」の怒りは凄まじいことになった。男性団員は怒りを隠そうともせずに武器を抜き放ち、女性団員は武器を抜いてはいないものの、逃がす気はないのかこちらに近付いてくる。凄惨な光景を予期した住民は急いで逃げ出し、荒くれや冒険者は見物だと言つて立ち止まる。

「捕縛します。痛い目にあいたくないなら抵抗しない方がいいですよ」

「いいや、それだけでは生温い。ハッキリと後悔する痛みを与え、衆目の前で謝罪させねば【ロキ・ファミリア】の矜持に傷が付く!!」

「そんな真似をした方が矜持に傷が付くぞ……脳みそが筋肉なのか?」

レインさん、謝りましょうよ——そう促す前に放たれる煽り文句。頭から一気に血が

引いた瞬間、「ロキ・ファミリア」の団員の姿が消えた。

そして――

「がばっ!？」

「へ、う――?」

バキンツ!! ドゴツツ!! と凄まじい金属音や衝撃音がしたかと思えば、女性団員が目の前で膝から崩れ落ちていた。その近くには男性団員の持つていた剣が半ばから折れて地面にめり込み、肝心の男性団員は館の上階層から足だけが見えた。意識を失っているのか、どちらも起き上がって来る気配がない。

「今の内に行くぞ」

周りの人と同じように理解に努めていた僕はいつの間にかレインさんに抱えられていて、一気にこの場を離れていくことに微塵も抵抗することができなかった。

(せめて気持ちだけ――ごめんなさい!)



「うえええ……」

ベルが排水溝に胃の中の物をぶちまけている。無理もない、その身に釣り合わない速

度で動き回ったのだから。何度もえさく姿を見ていると流石に可哀想に思えたので、背を優しくさすっている。本気で走ってたら上半身と下半身が泣き別れしてたぜ、のブラックジョークは今度に取っておこう。

しかし、先程の「ロキ・ファミリア」には失望しかない。レインの実力を見抜けず、自身の力を過大評価しており、更には他者の功績を自分のものと勘違いする始末。あんなのを眷属にする神の気が知れない。きつと胸も頭も中身が詰まってる残念な神なのだろう。

そして未だにLv. 6で燻っている無能ども。七年前の『大抗争』で仲間を失ったんじゃないのか、己の無力を自覚したのではないのか、更なる力を求めて進み続けることを誓ったのではなかったのか——失望を通り越して殺意が湧く。逃走の最中に『都市最強』と呼ばれる冒険者もLv. 7で止まっていると聞いて、つついベルを力一杯締め付けるところだった。

「うぼろおえええ……！」

「いや、いつまで吐いてるんだ」

ベルの吐瀉物の音と匂いで思考が中断される。レインは精一杯気を遣って走ったので、これはベルの三半規管の問題だろう。面倒だが鍛えてやらねば、と密かに決意するレイン。

「それでどうする。最大派閥があんな団員しかいないようなこの都市で、まだ入れてくれそうなの【ファミリア】を探すのか？ 下位の派閥ならあれより酷いものが多いぞ」

「……」

【ロキ・ファミリア】の蔑みの声と眼差しは、ベルにとって惨めで悔しかっただろう。善人ばかりがいた田舎ではぶつけられることのなかった『悪意』に晒され、心が挫けそうになっている。

しょうがない……頑張つて慰めの言葉を捻り出したレインが口を開こうとしたその時、

「おーい、その君い。さっきからすつこい吐いてるけど大丈夫かい？」

白い少年は——慈悲深い寵の女神と出会った。

白い兎と黒い戦士2

ベルが食い気味に眷属になりたいと言った女神——ヘスティアに連れられて辿り着いたのは忘れ去られた路地裏の奥、半ば廃墟と化した教会の地下に存在する『秘密の隠し部屋』、もとい「ヘスティア・ファミリア」の本拠^{ホーム}である。

「がっかりさせて本っ当にごめん！ あ、でもさ、住めば都つていうしさー！」

「ヘスティアは眷属がいらないと言っていただろう、阿呆め……どんな豪邸を想像してたんだ」

ここに来るまで気色悪いくらい緩んだ顔をしていたのに、今にも崩れそうな教会を見て唖然とするベルに、ヘスティアは誤魔化しか慰めかわからない言葉をかけ、レインはバツサリと切り捨てた。

ベルがショックを受けたのは野ざらしの教会そのものに住むと早とちりしただけであつて、おんぼろとはいえ部屋としての機能を保つ隠し部屋に案内されれば、顔を羞恥に染めながら露骨に安堵の息を吐いて立ち直つたが。

「さあ、君達^{ホーム}。本拠の紹介も終わったことだし、早速『恩恵』を授けようじゃないか！」

「し、しつこいかもしれませんが、本当に僕なんかを眷属にしてもいいんですか？」

「何言ってるんだい、ボクはむしろ君にこそ眷属になつてほしいと思つたんだぜ？ レイン君は強そうだけどさ、ベル君みたいに心から僕の眷属になりたい！ とか言つてくれなかつたし」

「レインさんは誰にも敬意を払おうとしませんかね……」

「わかるわかる！ 天上天下唯我独尊つて言葉がびつたりな態度の子供、ボクは初めて見たぜ！」

解せない。レインはそう思った。『神の恩恵』を一秒でも早くもらいたいというベルの思いを汲んで先を譲つてやったら、何故二人そろつて自分の悪口で盛り上がっているのか。

出会つて間もないのに深まつていくベルとヘステイアの仲とは裏腹に、レインの機嫌は少しずつ悪くなつていた。

「——はい、終わつたよ。これでベル君はボクの眷属で、「ヘステイア・ファミリア」誕生の瞬間さ！」

「ありがとうございます！ 神様の眷属として精一杯頑張ります！」

「ふっふーんつ、ボクは初めて眷属を創り、ベル君も初めて神の眷属になつた。つまり

……ボク等は互いの処女ハジメテと童貞ハジメテを捧げあつたつてことさべらあ!？」

「か、神様あ!？」

「テンションに任せて何を口走ろうとしている。処女神ではなかったのか、ヘステイア？」

とんでもないことを叫び出したヘステイアを、レインは鞘入りの魔剣でぶん殴った。ハジメテ云々の意味を理解できていないベルが不敬罪ですよと叫ぶが、レインに罪悪感はない。

「う、う（ごごご）……頭が割れるように痛い!？」

「物理的な痛みで済んでよかったです。派閥結成初日から主神が痴女だとベルに思わせたいのか？」

「神様、大丈夫ですか？」

「問題ナツシング！ ちょーつと初めて眷属ができたから浮かれちゃってネ！ 気を引き締め直すのにちょうど良かったよ、うん!!」

「そ、そうですか？ そういえば、互いの初めてって——」

「おっとベル君、今からレイン君にも『恩恵』を授けるから君は外に出ていてくれ！ 眷属同士とはいえ、『ステイタス』を見るのはマナー違反だからね」

「え、でも、レインさんはボクの時にはいたような……」

「お前は全アピリテイが初期値で『スキル』も『魔法』もないが、俺には見られたくない『スキル』が発現している。だから外で待ってろ」

そういうことなら……と、ベルは後ろ髪を引かれるように隠し部屋から出ていった。ふうー、とヘステイアは額を拭ってイイ笑顔を浮かべた。

「あ、危なかったあ……。ベル君に痴女神なんて思われていたら、僕はしばらく立ち直れなかったよ」

「俺には痴女神と思われてもいいのか？」

「んー、勘だけど、君はそういうのを気にしない子供だろうか？」

「……」

「ありきたりな言葉になっちゃうけど、君は魂そのものというか、心や内面を見て態度を決めている気がするんだよ」

レインは幾分かヘステイアを見直した。てちてちと音を立てて部屋の奥にあるベッドに向かう女神が善神であるのはわかっていたが、存外他者を見る目があったようだ。他人に甘えてぐーたら生活を満喫し、その結果ここにいるものだと思っていたのだが。

「なんかとんでもないことを考えなかったかい？」

「……？」

「何言ってるんだコイツみたいない顔しないでくれよ！ うーん、ずつと隠しておきたかった黒歴史を前触れもなく暴かれたような気分になったんだけどなあ……」

ヘステイアはしきりに首を傾げながらレインに服を脱いでベッドでうつ伏せになる

よう促すと、レインの尻の辺りに座り込む。既に指から神血イコルは流れているため、針で刺す必要はない。

滲み出る血をレインの背に滴り落とし、文字を書くようになぞり始める。ベルと違う鍛え抜かれた筋肉を堪能したのは内緒である。

「それにしても、恩恵持ちの子が僕の眷属になつてくれるなんてねえ。なんて名前の神か教えておくれよ」

「断る。そういう約束だ」

「えー、気になるじゃないか。L v. 8 の眷属を手放す神なんて、え
..... L v. 8?」

ビキツとヘスティアは硬直した。ギギギ、と錆びついた人形のように固まった笑顔で首を動かし、己の『恩恵』が刻まれた男の背中を凝視する。

そして——絶叫した。

「なっ、なんじゃこりゃあああああああ!?!」

レイン

L v. 8

力：EX 29541

耐久：EX 10087

器用：EX 78913

敏捷：EX 74359

魔力：EX 27118

狩人：A

耐異常：A

魔導：A

治力：B

精癒：B

覇気：B

剣士：B

《魔法》

【デストラクション・フロム・ヘブン】

・ 攻撃魔法。・ 詠唱連結。

・ 第一階位（ナパーム・バースト）。

・ 第二階位（アイスエッジ・ストライク）。

・ 第三階位（デストラクション・フロム・ヘブン）。

【ヒール・ブレッシング】

- ・回復魔法。
- ・使用后一定時間、回復効果持続。
- ・使用時、発展アビリティ『幸運』の一時発現。

【インフィニティ・ブラック】

- ・範囲攻撃魔法。
- ・範囲内の対象の耐久無視。
- ・範囲はL.V. に比例

《スキル》

カオスブランド

【憎己魂刻】

- ・成長速度の超高補正。
- ・ステータス自動更新。スキルのみ主神による更新が必要。
- ・効果及び詠唱を完全把握した魔法の模倣コピー。魔法効果は自身の魔力に比例。
- ・自身への憎悪が続く限り効果持続

「五月蠅い」

「ぐいあ!?!」

レインが起き上がったことで、跨っていたヘスティアは当然落ちる。運動神経皆無の女神に受け身を取れるはずがなく、床に頭部を打ち付けることになった。重力に逆らう巨乳にレインは目もくれず服を着る。

心配されなかったことの憤怒と異常な「スティタス」への驚愕でヘスティアは即座に復活した。

「ちよ、ちよちよちよちよ、ちようお……!」

「ちようちよならいないぞ」

「違うよ! なんだいその「スティタス」は!」

「どうもこうも、見たままだろう?」

「それだけ!? 自慢したいとか思わなかったのかい!! ベル君の目指すハーレムだって夢じゃないぜ?」

——永久の神生で一番と言っていい衝撃だったとはいえ、この時の問いと第二の眷属の背に刻まれた『スキル』の詳細を見ようとしなかったことを、ヘスティアは激しく後悔することになる。

「どれだけ強くなっても空しいだけだ……この力で守りたかった人は、もうこの世にいないのだから」

レインがいつ出て行って、入れ替わりでベルが戻って来たのかハスティアは覚えていない。しかし、一つだけ決めたことがある。

（まだ夢を見ているベル君がレイン君みたいにならないように、そしてレイン君が少しでも救われるように——ボクも、神おやとして頑張ろう）



「……がギルド……」

勇敢な戦士を横つた石像オプゼエのある前庭を通り抜け、綺麗な白色の石材で造られた万神殿バンテオン

——ギルド本部に足を踏み入れた僕は、この都市に来て何度目かもわからない感嘆の声を零した。

依頼が綴られた羊皮紙がたくさん貼られた巨大な掲示板、笑顔で冒険者登録の対応や相談にのっている美人な受付嬢、使い込まれた装備に身を包んでダンジョンに向かう冒

険者達……英雄譚や風の噂でしか知らなかった光景が目の前にある！

時間が正午よりも大分前だからか、受付窓口にはほとんど人はいない。僕は意気揚々と優しそうな雰囲気のエルフのお姉さんがいる窓口に駆け寄った——レインさんの「ベルはエルフが好みなのか……」という呟きは聞こえなかった。

「ぼ、僕っ、冒険者になりたいんです！」

ハーフェルフのお姉さんは瞬きを繰り返し、微苦笑しながら聞き返してきた。

「……か、確認しますが、新規の冒険者、登録の方でお間違いありませんね？」

「はいっ！」

熱意を漲らせて頷く僕に、お姉さんは苦笑を変えないまま登録申請書を差し出してきた。隣では薄い紫の長髪を揺らすちよつと冷たい美貌のエルフの受付嬢とレインさんが手続きをしている。……どちらも無表情で無言のまま作業をしているけど、きちんと意思疎通はできているのかな……？

書類の最後の欄にはアドバイザーがいるかどうか書かれていた。エルフの女性職員に印を付けて提出する。

「ベル、終わったか」

「あ、はい。丁度終わりました」

いつの間にかレインさんがすぐ側に来ていた。終わったことを伝えるとレインさん

は一つ領き、

「ならギルドの支給品を買って、さっさとダンジョンに向かうぞ」

「はい！」

「ち、ちよつと待つて！」

やつと僕も冒険者の仲間入りを果たせると装備が売られている長台カウンターに向かおうとしたら、書類に目を通していたエルフのお姉さんに呼び止められた。なんだろうと首を傾げると、お姉さんはキツとレインさんを睨みつけた。

「貴方はこの子の保護者ですか？」

「それに近いかもしれん。同じ「ファミリア」だしな」

「この子の前職には農民と記入されていますが、貴方は武器を持っているので傭兵稼業でもしていたのかもしれませんが。しかし、ダンジョンには一度も潜ったことはありませんよよね？」

「そうだな」

「都市の外でモンスターを倒したことがあるのかもしれませんが、ダンジョンのモンスターは危険度が違うんです！ 初心者ビギナーのその子を独断でダンジョンに連れて行くことしないで下さい！！」

なるほど。このお姉さんは初心者の僕をダンジョンに連れて行くこととしたことに

怒っているのか。レインさんにも事前情報の有無で生存確率は大きく左右されると聞いたことがあるし、この人はとても優しいのだろう。

でも……レインさんがそれを受け入れるかは別問題なんだよなあ。

「問題ない。『上層』までしか進む予定はないし、そこなら俺は死ぬどころか怪我する可能性は億分の一もない」

あ、やっぱり。神様にレインさんが他派閥と喧嘩でもしたらどうしようかと相談したら、『あー、うん、全力でレイン君を止めてくれ。死人が出るから。オラリオ全体に喧嘩を吹っ掛けようとする気配があったらボクに教えてくれ。迷宮都市が滅びるのは嫌だから、マジで』と真顔で言われたので、レインさんはとても強いということは知っていた。

なので断るだろうかと予想していた——ふてぶてしい断り方には驚いた——けど、断られたお姉さんの反応は予想外だった。

苦笑いで成り行きを見守っていた僕にも鋭い眼光が向けられた。すごく怖い。思わず悲鳴を零してしまうほど怖かった。どうやってレインさんはこの人と向き合ってたの？

「わかりました。二人とも、こちらの面談ボックスに来て下さい」

僕は一も二もなく従う。お姉さんには拒否するなら力尽くでぶち込むぞという迫力

があつた。レインさんも何も言わず部屋に入った。その様子を確認した後、お姉さんはどこかに消えた。

机と椅子しかない部屋で待つこと数分、お姉さんは戻つて来た……極厚の本を三冊も抱えて。何故か僕の額から冷や汗が流れた。

「本日からベル君のアドバイザーを務めることになりました、エイナ・チュールです。今日からよろしくお願いします」

「は、はい」

「それからレイン君、これからするテストで合格点を取れなかったら君のアドバイザーにもなるから。そのつもりでいてね」

「……俺とベルで態度が変わらないか？」

レインさんへの返事はドンツ！ という本が置かれた音だった。なんなら机も若干衝撃で浮いていた。膨れていく嫌な予感に突き動かされて本のタイトルを見てみる……『ダンジョンの基礎知識・上層編』と書かれていた。

対面の椅子で笑うお姉さん、改めエイナさんを見て、僕は下心満載でアドバイザーに『エルフの女性職員』と記入した過去の自分を殴りたくなつた。

この人は綺麗で優しそうな人じゃない。

「一時間でこの本を全部読んでね。そこからランダムで問題を出すから。間違ったらレ

イン君は最初からやり直し、ベル君は明日から一対一で講義だから、頑張つてね！」
綺麗で優しいけど、教育にはとてつもなく厳しい人だ！ 事実上の死刑宣告を受けて、僕は真つ青になりながら悟った。

その後、僕は明日から超スパルタなエイナさんの指導を受けることになった。

レインさんは一発で合格。適当にパラパラめくっていただけにしか見えなかったのに、あれで読めているなんてズルイと思う。真面目にやりなさいと怒っていたエイナさんも愕然としていた。肝心のレインさんは無表情のままだったけど。

突き付けられた頭の良さの違いに、苦手な座学が約束された未来のシヨックで意識が半分飛んでいた僕は、防具を買いに行く際にすれ違った冒険者達の会話を聞き取ることが出来なかつた。

『聞いたか、「ロキ・ファミリア」に喧嘩を売った馬鹿の話』

『おいおい、どこの自殺志願者だよ』

『なんでも団員の一人の顔を蹴り飛ばして逃げたらしい。蹴られた奴は上の歯と鼻の骨がほとんど折れていたみたいだぜ』

『死んだな、ソイツ。ロキが眷属を選ぶのって見た目の良さなんだろう?』

『ああ、絶対に落とし前を付けさせるって激怒しているみたいだし、近い内に冒険者依頼でも出るんじゃないか? 犯人捜しのさ』

『特徴とかねーのか?』

『噂でしかないが……全身真っ黒の男らしいぜ。誰かと一緒にいたらしいが、黒男のインパクトが大きすぎて誰も覚えてないってさ』



ダンジョン『上層』、1階層。

気分を切り替えて装備やバックバックを揃えたベルは、そこで短い手足と緑色のずんぐりとした体躯のモンスター、『ゴブリン』と相対していた。

『俺は何もしない。』
「ゴブリン」相手に負けるなら冒険者はやめておけ』

とだけ告げ、レインはベルの最初の交戦を壁際から眺めていた。本気でこの戦いでアドバイスは助言も援護もしないつもりである。

（『恩恵』を授かった奴がどうすれば『ゴ布林』に殺されるのかは知らんがな）

ベルは脅しじみたことを言われたと思って《短刀》をきつく握っているが、『ゴ布林』には無抵抗で股間や頭部を蹴られ続けられない限り死にはしない。幼い頃に『ゴ布林』の群れからタコ殴りにされたことのあるベルは絶対に無抵抗にはならないだろう。

（さて、ベルはどこまで戦いに向いているのか）

目の前で『ゴ布林』の攻撃を大仰に避けるベルを眺めながら思考する。

（長剣は間合いを詰められた時の対処が難しいと思つてナイフにさせたが失敗だったか？ いや、殴る蹴るの経験がないベルには手足の延長として扱いやすいナイフで間違いない。敵の攻撃を大きく見積もり過ぎだ。あれでは何度も隙を見逃す……が、今臆病なのはいいことだ。無策で突っ込んで死んだりしないだろうからな。本当に立つべき場所ですつ勇氣は早く持つてほしいが……あ、倒した）

目を閉じて身体ごと突撃したベルの《短刀》が『ゴ布林』の胸を貫き、モンスター急所である『魔石』を砕いた。かつてのトラウマであるモンスターを倒したベルはとびきりの笑顔で振り返し、

「レインさん、やりました！ 僕つ、初めてなのに、一人でモンスターを倒しましたよ!!」

「そうか………だが——」

「神様にも教えてきまーす!!」

「色々問題点が……は？」

初めてのダンジョンで『ゴブリン』を一匹だけ倒して帰還。英雄を目指す少年のまさかの行動に、レインは呆けたまま小さくなっていく後ろ姿を見送るしかなかった。

「まあいい……戦いで目を閉じる、無駄な動きが多い、稼ぎになる『魔石』を潰すなど言いたいことは多いが、一番の課題だった『生物を殺せるか』をクリアできただけ良しとしよう」

きつとベルは命の重さを理解できていない。自分達に危害を加えてくる生物に対する正当防衛という理由で、モンスター命を奪うころすことに抵抗をなくしている。

今はそれでいい。無知は罪だが、罪になるのは無知が害になった時だ。利になるなら無知のままでもいい。

「……ベルの奴、『ゴブリン一匹で勝利の凱旋』が黒歴史になってダンジョンに行かないとか言い出さないよな？」

脳裏に浮かんでくる予感に不安を抱きながらレインはそこその『魔石』と『ドロツプアイテム』をバックバックに放り込んでダンジョンを出た。……途中で真つ赤になってダンジョンへ走る白い少年とすれ違ったが、見なかったことにしてあげた。



収入は七二〇〇ヴァリスだった。『上層』である1〜4階層で三十分程度ならこんなものだろう、とレインは初心者には有り得ない額の収入が詰まった袋を持って北西のメインストリートを進んでいた。

昼飯時だからか休憩中の労働者や吟遊詩人、仲睦まじい獣人の家族などとすれ違いながら、光玉と薬草のエンブレムが飾られた白一色の建物、『ディアンケヒト・ファミリア』の本拠に入る。

『いへえつ、いへえよお！ 俺の歯が、俺の鼻があ……』

『鼻は治癒魔法で治せますが、歯は砕けて修復不可能だったため差し歯になります。型を取るのに時間がかかりますがよろしいですか？』

『大丈夫です。あ、お客さんが来たみたいですよ。コイツは私が見ておくのでアミッドさんは行っていいですよ』

『ありがとうございます。では、席を外します』

『ちふしよう、あの黒ずくろずふめ野郎、絶対に許さねえ……！』

底上げされた五感が治療院の奥から痛みと怨嗟が混じった声を拾う。何故だか知らないが、レインはこの声の主に『身の程を知ったらどうだ』と言いたくなかった。やらな
いが。

「お待たせしました。本日の御用件は何でしょう……か……」

診察室・治療院と書かれたプレートがぶら下がった扉を開けて出てきた銀髪の美少女、アミッド・テアサナーレは無表情の男を見て硬直した。

「久しぶり、アミッド」

レインは三年前りに出会った友人に小さく微笑みながら手を上げる。アミッドが固まったのは三年前よりずっと背が伸びたことに驚いたのだろう、と黙っていた。

「レインさん？」

「うん」

「本物ですか？」

「うん」

「どうしてここに？」

「オラリオに来たら顔を見せると約束しただろう」

「いつからオラリオに？」

「昨日から」

アミッドは小さく息を吐き、につこりと笑った。しかし、その目は笑っていない。

「レインさん……」【ロキ・ファミリア】に危害を加えましたか？ 具体的には顔を蹴り

飛ばしたりとか」

「したな。身の程知らずとか田舎者とか馬鹿にされたから、蛆虫と言いつ返したら斬りかかられてな。反射的に蹴ってしまった」

「はあ……特徴を聞いた時からもしかして、と思つていたんです。今は「ロキ・ファミリア」の方がいるので日を改めましょう。……とはいえ、約束を覚えていてくれてありがとうございます。お礼と言つてはなんですが、これを」

五〇万ヴァリスもする万能薬エリクサーが二本、カウンターのの上に置かれる。

「気持ちは嬉しいが、これは正当な対価を払わねばならない代物だろう。受け取れないよ」

「三年前もそう言つて断りましたよね？ 今度こそ、気持ちだけでなく感謝の品も受け取ってください」

今度はレインがため息を吐く番だった。心優しき頑固な友人は譲らないだろうな——と、アミッドが聞けばお互い様ですと言いつそうなセリフを思い浮かべつつ、レインは虹色の液体が入った瓶をバツクバツクにしまう。

「またな、アミッド。会えて嬉しかったぞ」

「……私もです。いつでもいらして下さい」

深くお辞儀をするアミッドに手をひらひらと振つて、レインは施設を出た。

——その後、本拠ホームに戻つたレインは『ミアハ様に五〇〇ヴァリスもする回復薬ポーションを貰つ

ちやいました！』『ふふん、ボクの神友はいい奴だろう！』と異母弟と女神にドヤられてイラツとしたので、単価五〇万ヴアリスの薬とベルとは比べ物にならない稼ぎを見せてけて二人の心を押し折ることになるのだが、この時の彼はまだ知らない。

白い兎と黒い戦士3

「……今、なんと言った？」

ギルドに設けられた小さな一室に響いた、低く、とても重い声が僕の耳朶を震わせる。たった五年の差で、そして対面にいるエイナさんと同じ年齢なのに、どうしたらつい背筋を伸ばしてしまう覇気を含んだ声になるのだろうか。汗を流しながらソファに座る僕はつらつらとそんな考えを並べる。

わかつている。これがただの現実逃避なんてことは。

「えーつと、ヴァレンシユタインさんに助けられて、好きになっちゃったのでエイナさんに情報を……」

「そうじゃない。お前が惚れた腫れたに至った経緯について聞いている。聞き間違えかもしれないからな」

隣にいるレインさんと目を合わせられない。別に大きな声や不機嫌な表情は一切していないのに、本気で怒ったエイナさんと一緒にいる時より胃が痛い。

「俺は今日、友人の頼みとある物を届けるために、お前のダンジョン探索の面倒は見れないと言っていたよな」

「は……」

「お前はこれまで窮地と言えるものに出会っていないが、武器を握って命のやり取りをするようになってまだ半月。どれだけ余裕だと思えても、それは1階層から4階層までの話だ。ダンジョンにもぐるなどは言わなかったが、5階層から下はまだ早いと教えたはずだ……違うか？」

「チガワナイデス……」

「ほう。ならば何故、お前は5階層で『ミノタウロス』に追い回されて死にかけ、あまつさえ【ロキ・ファミリア】の【剣姫】なんぞに助けられている？」

レインさんの声が一段と低くなった。この人が怒っているのは僕が言いつけを破っただけじゃなくて、【ロキ・ファミリア】に貸しを作るような真似をしたことなんだろう。

レインさん、本当にびっくりするくらい【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】が嫌いだからなあ……。詳しい理由は教えてもらえないけど。

「間違いなくその『ミノタウロス』は【ロキ・ファミリア】が怯えさせるなりして逃げ出した個体だろう。【剣姫】がお前を助けたことはマツチポンプもいい所だ。が、連中は蛆虫でも存在する価値すらないゴミ屑までは堕ちていないはずだし、お前の命を助けようとした姿勢は評価できる」

「じゃ、じゃあ？」

「何もしない。元々俺の言いつけを破ったお前にも責任があるし、相殺という形で見逃してやる」

「ありがとうございますー！」

エイナからの説教は受けておくことだ、という声も聞き流しそうになってしまいうくらいに僕は胸を撫でおろしていた。この件を理由にレインさんが「ロキ・ファミリア」を潰しに行かないか心配だったんだ、本当に。

レインさんが席を立つ。『魔石』や『ドロップアイテム』の入ったバックパックを持っているので、きつとギルドにある換金所に行くのだろう。換金をまだしていない僕も後を追って部屋を出る。

「いい話に纏めながら逃げようとするんじゃない！ ベル君はまだ説教が終わってない！ レイン君も偉そうなこと言ってたけどね、君は10階層まで行ってるでしょうが!! 「ロキ・ファミリア」を甘く見ていることも含めて沢山言いたいこと——ってドアが開かない!？」

エイナさんのお説教から逃げたくて部屋を出た瞬間に走り出していた僕は、レインさんが部屋のドアの隙間に『ゴブリンの爪』を挟んだことに気付かず、何故かエイナさんの叫び声にも気付けなかった。

急いで換金所に向かい、別々の窓口から本日の収穫を受け取る。僕は『ミノタウロス』

やヴァレンシユタインさんから逃げていたせいで、ダンジョンにもぐっていた時間が短くなったために一二〇〇ヴァリス。そしてレインさんは、

「七八〇〇〇ヴァリスになります」

……ざっと僕の六十五倍稼いでいた。噂によるけど『上層』レベルの五人パーティーが一日中ダンジョンに籠って稼げる金額は二〇〇〇〇ヴァリス前後。僕と同じかそれより少ない時間しかダンジョンにいなかったはずなのに、どうしてこんなに差が出るんだろう？ ヴァレンシユタインさんとお付き……な、仲良くなりたいた僕の上に圧倒的な男かせぎの格差がナイフとなって突き刺さる。

ええい、諦めないぞ。レインさんみたいな例外ばかりを見ていちや駄目だ。僕は僕なりに頑張ればいいんだから！

そう意気込みながらまだ時間がかかりそうなレインさんを待ったために、先に出口の近くにいとくと、

「おやおや、どうしてギルドにみすばらしい田舎の兎が紛れ込んでいるのですか」
「え？」

いきなり悪意の込めた声を投げかけられて振り向くと、そこには魔導士の装備を身に纏うエルフの男性がいた。未だに忘れられない「ファミリア」入団交渉失敗の時、十連敗目の派閥で歓迎されていた人だ。

硬直する僕を気にせず、エルフの男性は見下す表情を浮かべたまま口を動かす。

「君みたいなヒューマンを眷属にするなんて、どんなみすばらしい神なのでしょうか」
「……ッ！」

僕を拾ってくれた神様を——大切な家族であるあの人を侮辱された。ギルドの支給品じゃない上等な装備をしている相手の方が格上だとか、派閥同士の揉め事は避けた方がいいとか、ギルドで問題を起こせば罰則ペナルティを与えられるとか……全部どうでもよくなるほどに、頭の中が真っ赤になった。

激情に突き動かされるまま、薄ら笑いを浮かべる相手に掴みかかろうとして——腕を黒い手袋に包まれた手に掴まれて止められた。

「何をしている」

……きっと僕は踏ん切りがついていなかった。それによって生じた時間は、この人にとっては十分な余裕だったのだろう。何の感情も見通せない黒瞳に見つめられ、ぼつが悪くなった僕は項垂れるしかない。

「どうすればこの短時間で問題を起こせるんだ……とりたいが、大体の事情は理解している」

「……」

「——このエルフは度胸がないのだろう。エイナに好意を寄せてはいるものの、アドバ

イザーでエイナを指名する勇氣も彼女の指導を受け続ける根気もないものだから、お前に嫉妬して絡んできたんだろうさ」

「え、嫉妬ですか？」

「ああ、嫉妬だ」

燻っていた怒りが一気に霧散した。確かに大した接点もないのにどうしてこんなことを言われるんだと思っていたけど、この人の性格が悪いとかじゃなくてただの嫉妬？ エルフの男性を見る。レインさんの声はよく通るので周囲にははつきりと聞こえたのか、あちこちで笑い声が零れていた。笑われている本人は真っ赤になって震えている……ほ、本当に当たってたんだ。

「いいいいいい加減なことを言うなあ!? どんな証拠があつてそんな妄言を述べる!?」

「?」 話したこともないお前等がじゃれあう原因がこれぐらいしか思いつかないからだが?」

「なあつ?!」 だ、第一に、何故私がエイナ嬢に好意を寄せていると言えるのかね!」

「……何となく?」

「……もういい、帰る!」

肩を怒らせて立ち去ろうとするエルフの男性。しかし、途中で振り返って叫んだ。

「いいことを教えておいてやろう。半月ほど前に「ロキ・ファミリア」に喧嘩を売った馬鹿がいるらしくてな。そいつらは白髪と黒髪の男達だそう。見るからに腑抜けた面をしているお前達ではないだろうが、うっかり襲われないよう気を付けておくことだな！」

そしてそのまま町の雑踏に消えていった。

「……結局、何だったんでしようか？」

「髪色で誤解されたりしないよう対策しておけ、という純粋な忠告だろう。嫉妬の感情が先走って会話の始まりは最悪だったけれど、入団を断られて落ち込んでいたお前を気にかけていたんだらうさ。それでもなければこんな場所キルドで喧嘩を吹っ掛けたりしない」

言われてみれば確かに。神様を悪く言われて手を出しそうになっただけ、エルフのよう

に知的な種族の人がギルドで揉め事を起こそうとするだろうか？ 用があるとしても言つてその辺の路地裏に連れ込めば隠蔽だって簡単に済むのに。

「所謂『ツンデレ』という人種だ。プライドが高く、話題を選ぶセンスが最悪だがな」

「そういうえばレインさんの皮肉も軽めだった気が……ん？」

ふと気が付く。レインさんの言う通りならあのエルフさんは「ロキ・ファミリア」に喧嘩を売った二人組の片方に僕が似ていたから話しかけてきたことになる。つまり、

「ロキ・ファミリア」に喧嘩を売った人がいなければ、僕はこんな気分にならなかつたん

じゃ……。

本当の原因に思い当たりそうになった時、思考の海に沈んでいた僕の肩を誰かが叩いた。レインさんかと思つて振り向く。

「ヒッ」

「お説教は始まつてすらないし、こうしている間にも増えてるよ……ベル君」

隣にいたはずのレインさんは影も形もなく、代わりに鬼オウガの如きオーラを纏つたエイナさんが君臨していた。

僕は今日、『ミノタウロス』に続いて二度目の死を覚悟した。

「エイナからの説教は受けろと言つただろう？」

やつれて帰つて来た僕に薄情者レインさんはいけしやあしやあと言い放つた。涙目で飛びかかったけど一瞬で鎮圧された。滅茶苦茶悔しい。色んな意味で。

「神様……僕、強くなりたいです」

「うん……」

近い内に同じセリフを聞きそうな気がする。そうヘステイアの勘が囁いたが、彼女は何も言わずに神妙に頷いておいた。



喧嘩とも言えない小競り合いをした翌日の夕方。レインはベルと一緒に西のメインストリートを歩いていった。

朝まで不機嫌な様子を隠そうともせず一人でダンジョンに行ったベルだが、帰って来るなりお詫びとして外食でもしないかと言ってきたのだ。別に気にしていないと断つても『ゴブリン……小石……全身爆砕』と震えるベルは譲らず、仕方なく外食に同行することになった。

ちなみにヘステイアはいない。異常に伸びたベルの「ステイタス」を見るなり不機嫌になって、謎の打ち上げに行くと言って出て行ったからだ。

「あ、多分ここです」

「どうして多分なんだ」

「だって名前が……」

示された看板に綴られた店名を見てみる。『豊饒の女主人』……反応に困る名前だ。もつと言うならアマゾネスが働いていそうな名前だ。更に言うなら店員が喰って、客が喰われそうな名前だ。

ベルがここで食べると約束したのは可愛らしい純朴な街娘。なるほど、ベルが戸惑うのも頷ける。しかし入口から店内を窺ってみれば、ドワーフの女将と獣人やエルフの女性店員が働いているのが見えた。

「名前は確かにとんでもないが、飲食店なのは間違いない。入るぞ」
「え、いやでも、まだここにシルさんがいると決まった訳では……」

綺麗な女の子に免疫がない故にまごついていてベルの意見をガン無視し、レインは開きっぱなしになっている入口をくぐる。

「いらつしやいませー！ 何名様ですか？」

声をかけてきたのは薄鈍色の髪を後頭部で纏めた少女だった。店の制服である若葉色のジャンパスカートを着ていて、更に外見的特徴からこの娘がベルの話していたシル・フローヴァだとレインは察した。

二名だ——そう答えようとしたレインの口は、違う言葉を吐いていた。

「お前……何だ？」

「——」

「いや、変なことを聞いたな。忘れてくれ」

「……ふふつ、大丈夫です。久しぶりにそんなことを聞かれましたよ」

「そうか。ちなみにベルなら扉の陰にいるぞ」

「ありがとうございます！ お客様一名はいりまーす！」

声を張り上げながら入口に歩いていくシル。案内はしないのか、とシルの頭部から生えて揺れる一本の尻尾を見ながら思うレインは、ひとまず空いているカウンター席の一つに座った。何も言われないので大丈夫だろう。

用意されていたメニューを開く。一番値段が低いパスタが三〇〇ヴァリスだった。奢ってくれるベルの財布を心配したが、足りなければ自分が払えばいいと本日のオススメである肉料理をカウンター内でフライパンを振るう女将に注文する。

酒をどうするかと聞かれた。身体に悪いらないと断ったが、女将は醸造酒エールの入ったジョッキをカウンター叩き付けてきた。「男が酒にビビってんじゃないよ！」というでかい声と一緒に。余計なお世話である。

もったいないのでどうにかしてヘスティアの土産として持ち帰れないか考えていると、

「何の用だ？」

「……」

店員の一人であるエルフーリユーと呼ばれていた女性が斜め後ろに立っていた。無言で立ち尽くしていたかと思えば料理を運ぶためにどこかへ行き、それが終わればレインの後ろで佇むのを繰り返している。

注文した料理が来てもリユーはレインの側に立っている。シルのようにベルの隣に座って談笑するでもなく、ただひたすら佇んでいる。……何か言いたげに小さく口を動かしてはいるが、振り向かないレインは気付かない。

「……後ろに立たれていると鬱陶しいんだが」

「……ッ」

「何か言いたいことがあるならハッキリと言え。……気のせいかもしれんが、俺はアンタと初対面じゃない気がする」

ヒュツ、と背後のリユーが息を？む音がした。心配になって振り向けば、リユーは血の気の引いた顔で震えていた。柄にもなくレインは焦った。

「おい、大丈夫か？ エルフは他者との接触を許さないと聞くが、まさかお前は話すだけでも駄目なのか？」

「ちが……違います。違うんです……」

何故かレインが心配すればするほど、リユーの顔色は悪くなっていく。遂には目尻に涙が浮かんできた。チラホラと視線も集まり、レインの焦燥が煽られる。

異変を感じ取り、店員^{むすめ}を泣かされたと勘違いした女将^{ミア}の得物^{フライパン}が振りかぶられたその時

『御予約のお客様、ご来店ニヤー!!』

店にいる全ての者の視線を搔つ攫う集団——【ロキ・ファミリア】がやって来た。